

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	高野公彰	指導教員 (主査)	齋藤梓 准教授

論文題目	日本語版トランスジェンダー態度信念尺度の作成 —トランスジェンダーへの態度に対する基礎的研究について—
------	--

本文概要

【問題と目的】電通ダイバーシティ・ラボ (2021) の調査では「LGBT」という言葉の認知度は、2020 年には 80.1%に到達し、社会のセクシュアルマイノリティに対する関心は高まっている。一方でトランスジェンダーという言葉の認知度は、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアルの認知度と比較するとやや低い。社会には、トランスジェンダーに対する差別と偏見も多く存在する。当事者達は、未成年のあいだはもとより、就職・就労時には、性役割・結婚・家族形成の問題など、社会適応の悩みを抱くようになる (中塚, 2022)。このような社会の不理解から生じる生活上の不自由さ、抱える悩みの多さは、メンタルヘルスの悪化につながる。しかし日本において、トランスジェンダーに対する人々の態度をはかる尺度はあまり見られない。国外のトランスジェンダーの態度研究に関しては、Kanamori (2017) の Transgender Attitudes and Beliefs Scale (以下「TABS」と記す) が比較的新しい。TABS はこれまでのトランスジェンダー態度尺度より多次元的にとらえており、信頼性と妥当性も検証されている。TABS を日本語に翻訳し、信頼性と妥当性を検証することは日本のトランスジェンダー研究において有益だと考えられる。本研究では研究①で日本語版尺度の作成を行い、研究②として同性愛態度尺度では既に関係性が指摘されている「年齢」「性別」「接触度」「知識」「宗教」がトランスジェンダーの態度尺度にも影響を与えるのかを検証し、トランスジェンダーへの態度研究への基礎的検討を行う。

【方法】リサーチ会社を通じて成人 581 名 (男性 354 名, 女性 227 名, 平均年齢=49 歳, $SD=11.7$) に実施した。調査内容は①フェイスシート (性別, 性自認, 年齢, 母語, 最終学歴, 結婚歴, 宗教, 性的指向, トランスジェンダー当事者との接触度)。②日本語版 TABS (バックトランスレーションをして使用) ③日本語版改訂トランスジェンダー尺度/GTS-R (森・柳川・石丸, 2020) ④日本語版自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) ⑤日本語版社会的望ましさ尺度 (北村・鈴木, 1986)。⑥トランスジェンダーに関する知識の項目計 10 問 (予備調査を実施し作成) である。

【結果と考察】研究①探索的因子分析では 4 因子構造が確認され、「人間の価値」「対人関係の回避」「対人関係の快適さ」「ジェンダー信念」と命名した ($\alpha=.92$, $\alpha=.93$, $\alpha=.91$, $\alpha=.85$)。また、再検査信頼性 ($ICC=.94$) も示され、妥当性検証においても Kanamori (2017) と同様の結果であった。研究②相関分析と一要因分散分析の結果、宗教と信仰深さにおいていずれも有意差は見られなかった。トランスジェンダー態度信念に影響を与える要因を検討する為、年齢、知識、接触度を説明変数、日本語版 TABS の下位因子を目的変数にし、男女の多母集団同時分析を行なった ($GFI=.996$, $AGFI=.962$, $RMSEA=.026$, $CFI=.998$)。その結果、年齢と対人関係の回避と対人関係の快適さについては女性のみ有意なパスが見られた。一方で年齢とジェンダー信念では男性のみ有意なパスが見られた。知識については男女とも全ての下位因子に有意なパスが見られた。接触度と人間の価値は男性のみ有意なパスが見られた。接触度と対人関係の快適さは男女ともに有意なパスは見られなかった。本研究で作成した日本語版トランスジェンダー態度信念尺度は、トランスジェンダーに対する態度を日本国内で測定する尺度として使用可能である事が示唆された。また、トランスジェンダーに対する否定的な態度は不正確な知識が影響している可能性があり、適切な知識をより多くの人達が得ることが出来れば、トランスジェンダーへの誤った認識による否定的な態度が緩和され、差別・偏見を無くす社会を目指す一助となるだろう。